

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2016 秋号

76

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 寺内古墳群、相方遺跡 第2次調査の概要

寺内古墳群、相方遺跡発掘調査

特集 寺内古墳群、相方遺跡 第2次調査の概要

はじめに

寺内古墳群・相方遺跡の現在発掘調査をおこなっている地点は、和歌山電鉄岡崎前駅から北東に500mほど、和歌山東高校の東側に位置します。調査地点のすぐ東側には近畿自動車道が通っています。この地点では、NEXCOの計画する、近畿自動車道と歌山南スマートインターチェンジ（仮称）の建設と、和歌山県が計画する和歌山橋本線の改良工事および海草振興局建設部の庁舎建設に先立ち、記録保存のための本発掘調査を実施しています。

発掘調査は第1次と第2次の2回に分けて計画され、平成27年度に第1次調査を終え、平成28年度の春から第2次調査に着手しています（写真1）。里道（緑色のライン）をはさんで、南側の青枠で囲んだ部分が第1次調査をした範囲で、赤枠で囲んだ部分が第2次調査をしている範囲です。第2次調査の範囲は、破線を境に前半と後半の2回に分けて調査をおこなっています。

今回は、既に終了している第1次調査の

結果を踏まえ、現在おこなっている第2次調査のうち前半の部分を中心に、その概要についてお話ししたいと思います。



写真1 北西からのぞむ寺内古墳群、相方遺跡

第1次調査

寺内古墳群は、和歌山平野に点在する山塊のひとつ、岩橋山塊の岩橋前山と大日山の南斜面に点在する古墳の集まりです。東西1km、南北1.5kmの範囲にわたります。相方遺跡は、地表に土器が散らばっていたことから、新たに発見された遺跡です。今回はこれらの遺跡のうち、道路や建物を建設し、遺跡が壊れる部分のみを対象として調査をおこなっています。

第1次調査では、数棟の弥生時代後期から終末期の竪穴建物跡、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡や用水路と考えられる溝、埋没した谷の跡が見つかりました。このことから、長期間にわたって断続的に集落が営まれていたと推測できます。とりわけ、奈良時代から平安時代までの遺物や遺構は僅かであることから、この頃の活動は活発ではなかったようです。その後、平安時代末頃からの遺物が増加することから、この後は集落での活動は活発になっていったと推定できます。

第2次調査

第2次調査では、第1次調査の北側を調査しています。調査前の現況は果樹園で、一番上の畑の標高は8.8m、一番下の畑は5.0mで標高差は約4mの南西向き

段々畑でした。発掘調査は作業工程上、西半から先行して実施しました。

西半の調査範囲では、耕作土を除去すると、遺物包含層と呼ばれる、遺物を多く含んだ土の堆積が確認できました。その厚さは、30 cmから1 mとたいへん厚いものでした。土に含まれた遺物を採取しながら、遺物包含層を取り除くと、昔の地形が現れました（写真2）。

昔の地形は、山すそから続く南向きの谷であったようです。谷の斜面のうち、傾斜が緩やかなところに昔の人々が生活した痕跡である遺構（写真の白く囲った部分）が



写真2 遺構が現れた状態（西から）

確認できました。また、谷底には、青みがかった灰色の粘土、砂、黒い粘土や砂が、分厚く堆積していました。この部分は、かつて、

自然流路のような水辺とみられます。水の流れる場合は、自然流路底に砂が堆積し、水の流れる緩やかな時には、粘土や細かい砂、水辺に生えている植物が腐ってできた黒い粘土が堆積していきました。この自然流路に堆積した土の下の部分からは、

弥生時代末から古墳時代初頭の土器が、中ほどからは、古墳時代の須恵器や、古代の土器が、上の部分からは、中世の土器が出土しました。このことから、かなり長い期間にわたり水辺として機能し、時間をかけて、徐々に埋まっていったようです。部分的に底まで掘り下げて深さを確認した結果、谷底が北から南に向かって傾斜していることから、水の流れも、この方向であったと推定できます。自然流路の中からは、土器のほか木でできた製品や動物の骨などが出土しています。地下水位が高く、酸素に触れることが少ない環境では、有機質のものも腐らずに土の中に保存されるのです。

自然流路が埋まった後も、山側から水が流れ込んだようです。水の流れる山の斜面を削り、斜面にはいくつかの小さな谷ができました。水の流れにより、地面が削り取られて形成された谷は、開析谷かいせきだにと呼ばれます。こうして開析によってできた谷も、や

がて土砂が堆積し埋まっていきました。開析谷を埋める土には、瓦器がきと呼ばれる黒い碗の破片が豊富に含まれていました。この碗は、12世紀から13世紀頃に使われたものであることから、その谷が埋没したのもその頃と思われる。

自然流路から出土した遺物の中で特筆されるものに、墨書土器があります（写真3・4）。出土した位置は写真5の星印の場所で、自然流路の岸の駆け上がり部分に当たります。ひび割れが入っていますが、ほぼ完全な形で出土しました。想像をたくましくするならば、使っていた人が自然流路に誤って落としてしまったのか、ひびが入ってつかえなくなったため岸から自然流路へ捨ててしまったのでしょうか。土器は、素焼きの坏で、口径は約13 cm、高さは約3 cm、



写真3 墨書土器出土状況

底径は約8cmです。外面の底の部分に墨で二つの文字が書いてあるようです。書かれている文字は「大」と「二」でしょうか。書かれている文字の読み方や、その意味するところについては、今後整理調査をおこなっていくうえでの検討課題です。



写真4 墨書

また、検出された遺構には大小様々な柱穴・小穴、土坑、溝などがあります。そのうち特に注目すべきなのは、掘立柱建物跡です。建物を構成する柱穴の直径は60から70cmほどでした。柱穴の平面形は隅丸方形ないし円形で、合計6個見つかりました。それらは2.7m程の間隔で、並んでいません（写真5）。

建物の規模は、少なくとも2間×2間で建物の一片の長さが5.4m、床面積は30㎡以上の建物だったようです。

柱穴の中には、柱材が残存しているものもありました。柱材の直径は、少なくとも20cmあります。また柱材の下には、結晶片岩を据石として、1段ないし2段に重ね

て置いてあるものもありました。結晶片岩をおいているのは、柱が沈み込むのを防ぐためと思われる（写真6）。

柱穴の中には、据石や柱材が残っていないものもありました。柱材は、再利用するために抜き取られた可能性もあります。

掘立柱建物跡は、高低差50cmほどの緩やかな斜面で検出されました。しかし、柱穴の底や据石の上の面の高さは標高5mほど（±10cm程度の差の高さにあります。元々は平坦な場所に建てられていたのかもしれませんが、建物が放棄された後、開析作用



写真5 掘立柱建物跡（上から）



写真6 柱と据石の残る柱穴

により地面が削りとられたのかもしれない。建物の南西側の柱穴が残っていないのも、そのためと思われる。建物跡脇の逆L字形の溝も、建物の軸と並行することから、建物に伴う溝であると考えられます。柱穴からの出土遺物が少なく、今のところ建てられた時期については断定できません。

第2次調査は、現在反転して東半の部分に着手しています。現時点で注目される遺構は、結晶片岩で組んだ溜桝と思われる遺構です（写真7）。約1m×1.2mの長方形で、深さは1mほどです。検出した当初は石組の井戸と考えていました。しかし、底まで掘り下げた結果、井戸程は深くないこと、底は固く締まった土で、地下水



写真8 溜桝から出土した瓦器椀



写真7 溜桝と思われる遺構

が通る砂の層まで掘り込まれず、水がほとんど湧き出さないことから井戸ではないと思われる。そのため、水を溜める溜桝ではないかと考えています。石組周辺と遺構の埋土の中から見つかった土器は、やはり瓦器の椀が多くみつかっています(写真8)。それらは、形の特徴から12ないし13世紀頃のものと考えられます。したがってこの溜桝もその頃にはその役目を終え埋め戻されたと考えられます。

その他に注目される遺構としては、竪穴建物跡があります。今のところ、5棟分が確認されています(写真9)。

大きさは、一辺が4〜5m程度の正方形です。竪穴建物跡の中には、柱を立てるための穴である柱穴や、火を焚くための炉を備えたものもあります。建物跡から出土する土器は、弥生時代の終わり頃のものであることから、建物として機能していた時期もこの頃と考えられます。

おわりに

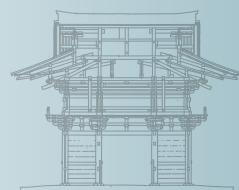
第1次・2次調査の遺物の構成は共に同様の内容です。第2次調査の前半では、調査地の大半が、急斜面の谷か谷底の自然流路で、平坦な土地は少なく、遺構の数はそれほど多くはありませんでした。対して、谷底からは豊富な遺物が出土しました。出土する遺物の年代は弥生時代終末期・古墳

時代後期・奈良時代・平安時代後期〜末・鎌倉時代です。この結果は、第1次調査と概ね合致しています。二つの地区での、人々が生活していた時期に、それほどおおきな時間差はないようです。しかしながら、第2次調査では、古代の遺物も一定量出土しています。今後調査が進むにつれて、第1次調査で人々の活動が活発ではなかった時期を埋めるような遺構や遺物が見つかる可能性もあります。また、後半部分は、前半部分に比べて旧地形の傾斜が緩やかであるため、遺構の数も多いと予想されます。

(加藤達夫)



写真9 調査中の竪穴建物跡



高原熊野神社の保存修理

高原熊野神社は、田辺市中辺路町高原にある熊野参詣道沿いの神社です。草創・沿革の詳しいことはわかりませんが、御正体^{みしょうたい}裏面の墨書に応永十年（一四〇三）に熊野本宮大社から若王子を勧進したとあります。本殿は中規模の一間社春日造、檜皮葺の社殿で、熊野参詣道沿い最古の建物です。熊野路の王子社には古い社殿が少ない中、室町時代の形式を残しているのは貴重である。と昭和三十六年四月一八日に県指定文化財に指定されました。

境内は、国史跡「熊野参詣道」の一部として、また国名勝「南方曼陀羅の風景地」のひとつとして指定されています。「周辺の村民が一丸となつて神社の合祀に反対したため残された。」と南方熊楠が伝えている境内には、南方が書き留めた樹齢八〇〇年にも及ぶと伝わる巨大なクスノキをはじめ、ウラジロガシ・カゴノキ等の大木が叢生し、室町時代の様式を残す本殿とともに

霊地としての風景を伝えていきます。

本殿は平成八年に屋根葺替・塗装工事が行われましたが、檜皮葺の屋根にコケが生え雨漏りの心配があり、棟の千木・勝男気も腐朽して取替が必要でした。塗装や彩色は全面的な修理を行わなくても大丈夫でしたが、彩色の剥落止めと補筆が必要でした。そこで県の補助事業として保存修理を平成二十八年二月から行っています。

仮設の素屋根を掛けて、檜皮の解体を行いました。解体後、小屋組内部の調査を行いました。小屋組は桁

から上が、すべて取り替わったことがわかりました。垂木・化粧野地板も正面東隅を除いて、新しくなっています。墨書から昭和三十二年に地

元の大工による仕事であることがわかりました。本殿の中には台風により大きな枝が落ちてきて屋根が大破し、修理した旨を書き記した板が残されています。この時の破損があまりにも大きかったためこのような修理が行われたと考えられます。修理には我々修理技術者の大先輩である竹原吉助氏が指導にあたりましたが当時の修理を知る地元の高老が教えてくれました。大きな修理があつたにもかかわらず昔の姿を伝えているのは、この指導のおかげかもしれません。（寺本就一）



写真1 高原熊野神社本殿（正面）



写真2 小屋組内の墨書

先日、旧西村家住宅の修理で物置小屋の屋根瓦を降ろしました。瓦は建物の修理後にも、なるべく再使用して葺くようにしています。この時に古い瓦と新しい瓦を、どの程度、取り替えなければならぬのか調べることも仕事のひとつです。ですから職人に頼りきりではなく、再利用できる瓦を自分でも見極めることによって少しでも残していくことを考えています。そして瓦の選別には「木槌・金槌」を使っています。瓦の表面を軽く叩いて、音を聴くと状態を確認することが出来るのです。

良好な瓦は叩くと軽やかで澄んだ高音が響きます。比べて、劣化した瓦の場合は、重く鈍い音で叩き心地がよくありません。この作業を何百枚と繰り返し、瓦を正常なものとの欠陥があるものに選別していきます。中には、微妙な打音を響かせる瓦もあり、評価が難しいものがあります。選別する者によって再利用するのか、しないのか判断が分かれるところですが、破損等も合わせて考慮して瓦を整理していきましました。

今回は選別と一緒に、ブラシやたわしを使って、瓦に絡みついたツタや土を落として綺麗にしてから保管することになりましたが、八月の炎天下では体力の必要な作業で、実際に自分でやってみると思ったよりも時間が掛かってしまいました。今後、実施する主屋の葺き替えを効率よく進行させるにはどうすれば良いか考える機会になりました。(大給友樹)



降ろした瓦の選別作業

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

はじめまして、本年四月より文化財センターに採用されました川崎雅史と申します。職場にはもう何年もお世話になっており、世間では肩たたきをされる年齢でもありまして、なんらフレッシュ感もないのに、この期に及んで新任のご挨拶とあって大変恐縮しております。

これまで、和歌山県南部の遺跡を中心に発掘調査し、南の方の遺跡のことなら人一倍分かっているつもりです・多分。今も新宮市の新宮城下町遺跡の発掘調査に関わっていますが、各時代の遺構が重なり合っって見つかる状態で、とにかく内容の濃い遺跡です。想定外が多すぎて、発掘に対する自信も失いそうで、過去一番苦戦した遺跡となっています。まだしばらく調査が続きますが、追って成果を発表できればと思っています。

ジェネレーションギャップを感じるこの頃ですが、職場の皆さんの足を引っ張らぬように、職務を全うしたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

(川崎雅史)



催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2016 年秋～冬)

(公財) 和歌山県文化財センター

- 企画展「紀州のあゆみ 一和歌山県内埋蔵文化財発掘調査速報展一」

場所：岩出市民俗資料館

2016年11月 2日 (水)～11月28日 (月)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 秋期特別展「岩橋千塚とその時代～紀ノ川流域の古墳文化～」 2016年10月 1日 (土)～12月 4日 (日)
- 特別展記念講演「岩橋千塚と紀氏の系譜」 2016年10月 9日 (日)
- 特別展セミナー①、②、③ 2016年10月16日 (日)、23日 (日)、30日 (日)
- 特別記念講演「群集墳の成立と展開」 2016年11月20日 (日)

和歌山県立博物館

- 特別展「戦乱の世から泰平の世へ 一16～17世紀の紀北・泉南地域一」
2016年 9月10日 (土)～ 10月10日 (月)
- 特別展「ろせつはつらつ 蘆雪潑刺一草堂寺と紀南の至宝一」
2016年10月18日 (火)～ 11月23日 (水)
- 企画展「和歌浦・屏風・名所」
2016年12月 3日 (土)～ 2017年1月15日 (日)

和歌山市立博物館

- 特別公開「重要文化財馬冑の実物展示」 2016年10月 1日 (土)～10月30日 (日)
- 特別展「城下町和歌山の絵師たち」 2016年10月22日 (土)～11月27日 (日)

高野山霊宝館

- 秋期企画展「真田丸」の時代と高野山」 2016年10月 8日 (土)～ 2017年 1月15日 (日)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「寺内古墳群、相方遺跡発掘調査」
- 2 特集「寺内古墳群、相方遺跡 第2次調査の概要」
- 6 文化財建造物課 短信「高原熊野神社の保存修理」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物修理技術者の道具⑤」木槌・金槌
「新任のご挨拶② 埋蔵文化財課」
- 8 催し物案内



風車76 (2016・秋号)

平成 28 年 9 月 30 日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
maizou-1@wabunse.or.jp